

野木小同窓会報

第 21 号
平成 22 年 12 月
野木小学校同窓会編集部



第47回卒(昭和31年)
同窓会長(兼田) 藤田 嘉昭

オンボロのピアノ

同窓会員の皆様におかれましては、ますますご健勝にてご活躍のことと、お慶び申し上げます。

さて、一昨年の「野木小学校百周年記念事業」は数多くの方々の協力とご尽力により成功のうちに終わりましたが、今年の夏は、この百年を超える年月の中でも最も暑い夏を経験することになりました。毎日の挨拶は必ず「ほんまに暑いなー。一体どうなるんやろー」という言葉ばかりで、日本中が熱中症の心配ばかりしていた気がします。と同時に戸籍のある行方不明の高齡

者問題も話題になりました。今年度同窓会では役員、事務局が中心となつて各集落の出身者の現住所や生死等をより正確に把握するための調査を行いました。人情厚く人と人のつながりの深い野木のこ

と、戸籍のある行方不明の高齡者など存在するはずがありません。しかし、就職や転勤、進学などで変更された住所が分からず、同窓会報が返送されてくる場合があります。各ご家庭におかれましては、お差支えが無ければ、ご兄弟、ご子様の住所変更がありましたら、

その都度事務局までご連絡いただけると幸いです。今回の調査で野木小学校の同窓会名簿がより正確で、さらに使いやすいものになることを期待いたしております。各集落の役員の皆様、本当にお世話になりました。

また、同窓会報の原稿では、いろいろな皆様のご協力を得ました。様々な年代、地域、性別の異なる方々からご寄稿をいただき、紙面が大変懐かしく、ころあたたまる内容になりましたこと、改めてお礼申し上げます。

私事で恐縮ですが、小生も皆様方同様、野木小学校には大変お世話になつた思い出がございます。昭和三十六年、もう五十年前になりますが、すでに高校生になつていた小生は、音楽の道を志していました。大学受験にはピアノ演奏が必須でした。上中中学校では、故・速水卓雄先生のもとで、高校では部活でと、いろいろな楽器にはなじんでいたのですが、いかにせん、ピアノはどここの家にもなく、ピアノの練習には困ってしま

ました。そこで思いついたのが野木小学校の、当時は木造の講堂(体育館)の右片隅に置いてあつたピアノ。失礼ながらそれは、現在ではどこをさがしても見当たらないほどの「オンボロのピアノ」でした。調律もされておらず、二・三個の音は鳴りませんでした。土曜日の午後と日曜日、そして自分の時間のとれる放課後はほとんど講堂にお邪魔しました。

まず、職員室に行つて「すみません。今日もピアノの練習させて下さい」とお願いをするのですが、「今日も...」といつても、日直の先生は変わるわけですから、そのたびに練習する理由を聞かれたような気がします。そのうち先生方にも知られるようになり、「藤田君、ようやるなあ、もう毎回毎回頼みに来んでもええから、かつてに練習して帰んなー」と言ってもらえるようになりました。

現在と違って、土日でも講堂への出入りは自由でしたが、児童はいなくてシーンとした講堂であつたと記憶しています。

広い空間を独り占めにして、毎回一時間ほど練習させていただきました。

今でも藤田カブローの名前で音楽活動は続けていますが、一年ほど通つた当時のことをたびたび懐かしく思い出します。あの頃の「オンボロピアノ」と「日直の先生方」には今も感謝しております。





野木小学校長 湯浅 邦夫

ふるさと

育ったところ
 必ずしも家庭ではない
 心を育てられたところが
 家庭である
 学んだところ
 必ずしも母校ではない
 よき師よき友にめぐり会え
 たところが 学校である
 生まれたところ
 必ずしも故郷ではない
 心をとどめたところが
 故郷である

この文は、どんなに豪華な
 家に住んでも、どんなに立派
 な校舎に学んでも、人間が最
 後に行き着くところは、真に
 心を育んでくれたところであ
 ると教えています。
 家庭・学校・地域の連携が
 叫ばれて久しくなります。三
 者がそれぞれの立場で子育て
 の責任を相応に分担し、社会

全体で優しくも厳しく子ども
 の心を育まなくては、子ども
 の心には、家庭も学校も故郷
 も「ふるさと」として宿らず
 に大人になってしまいうのかも
 しません。

国際化・情報化の進展の中で、
 子ども達は住み慣れた町や日
 本を離れて生きていくことに
 なります。そんなときに、ふ
 と親や兄弟のこと、先生のこと、
 友だちのこと、故郷の山河の
 ことなどを懐かしみ郷愁ある
 いは望郷の念にとらわれるこ
 とがあるでしょう。それはき
 つと、ほろ苦い喜びや幸せ感
 なのかもしれません。

さて、今年は9月12日に野
 木地区民総合体育大会が盛大
 に行われました。それ以前の
 8月29日には、猛暑の中、そ
 の準備のために育友会の奉仕
 作業で、学校の周辺の草刈り
 に汗を流して下さいました。



体育大会では地域の皆様の競
 技へのエネルギーに感動し、
 育友会役員の皆様のバザーで
 の支援活動に心強く思った次
 第です。このような皆様の姿
 の一つ一つが、子ども達の心
 に深く「ふるさと」を刻みこ
 むことになるのだと確信しま
 した。未来からの留学生、地
 域の宝物である子ども達に、
 よき「ふるさと」を提供する
 のは私たち大人の責務です。
 同窓会の皆様、共に頑張りま
 しょう。今後ともよろしくお
 願いいたします。

職員室より



後列左側より 西田、豊田、石倉、島田、西川、羽賀、水江
 前列左側より 三宅、下島、森下、湯浅校長、岩崎教頭、河村、高田

野木小の子ども達もそうですが、アットホ
 ームな職員室には、いつも笑いが絶えません。
 しかし、「ここぞ」という時には、抜群のチ
 ムワークで乗り切っていくベストスタッフです。
 子ども達は、一輪車、竹馬、サッカー、時
 にはグラウンドゴルフにと外遊びに夢中です。
 なかでも、児童集会での全校遊び、「たこの魚
 とり」(野木小学校にしかない伝統遊び?)
 は、みんなに大人気。欠席もほとんどありま
 せん。なんと言っても本校の自慢は、元気な
 校歌。美しく、はじける様な歌声に、聞く人
 誰もが感動します。それというのも野木っ子は、
 みんな歌が大好き。児童会企画の「カラオケ
 大会」は、全校で大盛り上がりです。



卒業から五十年

第52回卒(昭和36年)
福井県議会議長(上野木)

中川 平 一

同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

日頃はいつも温かいご支援を賜り誠にありがとうございます。お陰様にて、私このたび第九十二代福井県議会議長に就任させて頂きました。これも野木地区の皆様のご支援のお陰であり、心より感謝いたしております。身に余る重責ではありますが、地域の皆様そして福井県民の幸せを願い一杯働かせていただきましたと思っております。

さて、私は昭和二十三年生まれで今年六十二才になりました。野木小学校を卒業してからちょうど五十年になります。野木小学校で過ごした六年間は、鮮明に昨日のことのように記憶に残っており早半世紀も過ぎたのかと我ながら驚きです。

人生における出発点とも言えるあの六年間は我が人生の礎となつていきます。団塊世代の私たちは五十二名の同級生とともに夢中で力いっぱい遊び、学び、その中で結ばれた絆は今もしっかりと存在すると感じています。

最近、私は全国の県議議員の方々と話をする機会が増えたのですが、福井県の子どもの日本一の学力が話題になることがあります。大変誇らしく、嬉しいことであります。このことは、学校の先生方の熱心なご指導によることはもちろんのこと、それだけではなく、この家庭の力、つまり三世代、四世代に亘る家族のいくつもの温かい目がいつも子どもたちを見守っていることも学力向上の要因となっております。さらに地域や集落の行事を通して、あるいは下校時の見守り隊として、あるいは農作業の合い間にも、我が子や、孫だけでなく地域の子どもみんなを地域住民が見守っているという都会にはない地域の力も見逃せません。子どもたちが学力だけでなく心身ともに健やかに育つよう学校、家庭、地域が思いを一つにして子どもを見守り、導き、育むその大きな力が福井県にはあるのだと思います。

いつの時代も未来を担う子どもは何にも勝る宝であります。経済や環境問題、そして不安な世界情勢等々、由々しき難問が山積している現在、今を担う私たちが五十年、百年の体計をもつてその力を尽くしていかなければならないと改めて思っています。

今、野木小学校に通う子どもたちが五十年後、私の年齢になった時どんな社会になっているのだろうか、今よりもっと幸せであることを願います。私もがんばりたいと思います。今後共、皆様のご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。

旧職員からの便り

二十三年前の毎日

(昭和59年度〜61年度 職員)

現福井市国見中学校 高橋 正和

いつだったか、野木地区の道で挨拶を交わしたお年寄り。返事に困りました。「平太夫にこんなことを言われました。さん」とは、当時、県知事だ。越前の先生ですか。平太夫 った中川平太夫氏のことです。



印象に残る言葉です。
私が野木小学校に勤務したのは約二年半。やりたいことがありすぎて、瞬く間に月日が過ぎ去りました。若さだけが取り柄の私を、先生方や保護者の方々は忍耐強く見守って下さいました。感謝の気持ちで一杯です。

我が学級の卒業前三ヶ月間を、当時の学級日誌から紹介します。
(一) は私の解説です。

一月二四日(水) 晴れ
倉谷ま・北村

雪がひさしぶりに降って、外でみんなが遊んでいた。雪がっせんばかりしないで外の遊びも考えたいと思う。(よく雪合戦をしました)

一月二〇日(火) 雪

塚本・大久保

六限目は霜中さんに感謝状を書いた。なみだをながして読んでくれるとうれしいな。(霜中さんは用務員さん。いつもあたたかく見守って下さいました)

二月 七日(土) 曇り

竹村き・田中じ

今日、保育所へみんなで行った。

さぎのえさをやりに行った。でも今日はがびようと名前の紙をわすれた。そこが私達クラスの悪いところ…。でも、今日は充実した一日だった。

二月二四日(土) 不明

橋本よ・森口

きょうは宿題がないのでうれしい。ピース。

三月 七日(土) 晴れ

田中ま・奥本

今日はパーティーの計画案とか六年生を送る会の練習をした。かなりいそがしい。この三月という月はいそがしいけどがんばるぞ。(これはクラス解散パーティーの計画案づくり。楽しみは自分たちでつくれと、年中パーティーをやっていました)

三月二四日(土) 雨

金田・大久保

音楽ワークのわからないところがあつた。一、二時間目はゴミ箱作りでたすかつた。(ゴミ箱は木製。みんなで作った卒業記念品です) 二十三年前の子ども達の様子です。

子です。

その後、野木小とはまだ繋がりがありません。六年前、

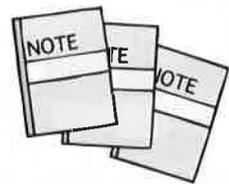
福井豪雨の時、被災した我が家に数名の教え子や友人が駆けつけてくれました。その中のひとり、野木小の教え子でした。

被災生活の中で、唯一の楽しい思い出です。

第二のふるさと野木

(昭和63年度〜平成4年度・平成16年度〜19年度 職員)

現梅の里小学校(熊川) 宮川直美



私が初めて野木小学校に寄せていただいたのは、二十年以上も前になります。我が子と同年代の子ども達をたくさん担任させていただきました。不注意だけがをして足が不自由になった時、「荷物持ってあげる。」と助けてくれた子、鉄棒の前転で「先生は見とっ

なんとか乗れるようになりました。そして十二年後、今度は教頭としてお世話になりました。以前担任した子ども達の保護者の方、お世話になった地域の方々など顔見知りがいっぱいで、慣れない教頭職にも安堵感を与えていただきました。

手本を見せてくれた子など本当に心優しい可愛い子ども達でした。五年間の担任時代、暑い中での鼓笛の練習にもがんばりました。一輪車を子ども達に教えてもらって、私も

に感激しました。家庭訪問や行事の時に少しお会いしただけで、ちゃんと覚えて

いってくださったのです。「畑がいるんか。よっしゃ。」と気軽に引き受けてくださる地域の方の、「野木の宝」である子どもを思う気持ちの強さは何処にも負けません。米・野菜作りをはじめ、下校見守りなどボランティアとしてお世話になったことは数え上げればきりがありません。大正琴や童謡を歌う会の皆様との交流、「りふれつしゅ・ままあ」の皆様とのリズムミックダンスや紅太鼓の皆様との太鼓の演奏で、縄文祭りのオーブニングや「パレア若狭」のステージに立たせていただいたこと、そして暑い中汗を流していただいた池作りなどとても印象深い思い出がいっぱいです。給食に地場産の野菜を供給していただくシステムもでき、本当に野木っこは幸せです。そして教頭としての仕事の中で、一番大変だったのは、野木小学校創立百周年記念行事に向けての事務処理でした。名簿の確認や寄付のお願い等百周年記念行事に向けての仕事はなかなかのものでした。記念の当該年度には異動とな



平成2年9月23日 地区体育大会にて
鼓笛隊指揮者とバトンガールのメンバー

会員からの便り

杉田玄白の残したもの

第61回卒(昭和45年)

栗東市 内藤 裕二

ぎやかに過ごすことができる心穏やかな環境、④整備率の高い医療施設や福祉施設、⑤高い貯蓄率など心の健康を支える経済的ゆとり、以上の五つの要因がかかれています。

でも、福井県の健康長寿はどうやら「食」それも「医食同源」の意識が根付いているからではないでしょうか。江戸時代に活躍した蘭学者杉田玄白は、福井県小浜藩の出身で、罪人の腑分け(人体解剖)を

実施、観察し、ヒトの解剖学の教科書である「解体新書」を作成したことで西洋医学の発展に寄与した人物です。当時としては驚くべきことに彼は八十五歳という長寿をまつ

とうしています。彼が残した「養生七不可」にその秘密があるのではないかと考えるのは、私だけでしょうか。この書こそ「医食同源」そのものではないかと考えられます。本文は難しいので、現在風に言い換えると、①昨日の失敗は後悔しない。②明日のことは心配しない。③食べ物も飲むものも度を過ぎない。④変わった食べ物は食べない。⑤何で

「若狭町」が出来たことを聞きました。いい名前ですよ。さて、この長生きの秘密はどこにあるのでしょうか？県政だよりには以下の①お米を中心としたバランスのよい食事や豆類・イモ類を好む食生活、②女性や高齢者も働き者で、ポランテニア活動が盛んななど生きがいをもった暮らし、③祖先や家族を大切に作る気風があり、三世代家族が多くに

です。さらに興味深いことは、元気で日常生活を送っておられる方、つまり健康長寿と平均寿命の差が福井県では1.5歳しかないことです。この差はいわゆる寝たきりの状態にあるわけですが、日本の平均は七歳程度です。つまり、福井県の方々は元気で、健康に長生きしていることになりました。

「若狭町」が出来たことを聞きました。いい名前ですよ。さて、この長生きの秘密はどこにあるのでしょうか？県政だよりには以下の①お米を中心としたバランスのよい食事や豆類・イモ類を好む食生活、②女性や高齢者も働き者で、ポランテニア活動が盛んななど生きがいをもった暮らし、③祖先や家族を大切に作る気風があり、三世代家族が多くに

です。さらに興味深いことは、元気で日常生活を送っておられる方、つまり健康長寿と平均寿命の差が福井県では1.5歳しかないことです。この差はいわゆる寝たきりの状態にあるわけですが、日本の平均は七歳程度です。つまり、福井県の方々は元気で、健康に長生きしていることになりました。

「若狭町」が出来たことを聞きました。いい名前ですよ。さて、この長生きの秘密はどこにあるのでしょうか？県政だよりには以下の①お米を中心としたバランスのよい食事や豆類・イモ類を好む食生活、②女性や高齢者も働き者で、ポランテニア活動が盛んななど生きがいをもった暮らし、③祖先や家族を大切に作る気風があり、三世代家族が多くに

です。さらに興味深いことは、元気で日常生活を送っておられる方、つまり健康長寿と平均寿命の差が福井県では1.5歳しかないことです。この差はいわゆる寝たきりの状態にあるわけですが、日本の平均は七歳程度です。つまり、福井県の方々は元気で、健康に長生きしていることになりました。

「若狭町」が出来たことを聞きました。いい名前ですよ。さて、この長生きの秘密はどこにあるのでしょうか？県政だよりには以下の①お米を中心としたバランスのよい食事や豆類・イモ類を好む食生活、②女性や高齢者も働き者で、ポランテニア活動が盛んななど生きがいをもった暮らし、③祖先や家族を大切に作る気風があり、三世代家族が多くに

です。さらに興味深いことは、元気で日常生活を送っておられる方、つまり健康長寿と平均寿命の差が福井県では1.5歳しかないことです。この差はいわゆる寝たきりの状態にあるわけですが、日本の平均は七歳程度です。つまり、福井県の方々は元気で、健康に長生きしていることになりました。

「若狭町」が出来たことを聞きました。いい名前ですよ。さて、この長生きの秘密はどこにあるのでしょうか？県政だよりには以下の①お米を中心としたバランスのよい食事や豆類・イモ類を好む食生活、②女性や高齢者も働き者で、ポランテニア活動が盛んななど生きがいをもった暮らし、③祖先や家族を大切に作る気風があり、三世代家族が多くに

です。さらに興味深いことは、元気で日常生活を送っておられる方、つまり健康長寿と平均寿命の差が福井県では1.5歳しかないことです。この差はいわゆる寝たきりの状態にあるわけですが、日本の平均は七歳程度です。つまり、福井県の方々は元気で、健康に長生きしていることになりました。

「若狭町」が出来たことを聞きました。いい名前ですよ。さて、この長生きの秘密はどこにあるのでしょうか？県政だよりには以下の①お米を中心としたバランスのよい食事や豆類・イモ類を好む食生活、②女性や高齢者も働き者で、ポランテニア活動が盛んななど生きがいをもった暮らし、③祖先や家族を大切に作る気風があり、三世代家族が多くに

つてしまつたのですが、学校と地区の皆様が力を合わせられて、とても立派な記念式典が催されました。記念誌も心に残る素晴らしい出来栄でした。野木地区の団結の力を披露した最良の舞台だと思われました。野木地区の皆様とは、たまにお会いすることもあり温かい言葉をかけていただくことを本当にありがたく感謝

しています。第二のふるさととも言える野木地区、本当に温かい野木の方々。どうかそのままで変わらぬにいてと願っています。末筆ながら、野木小学校・野木小学校同窓会・野木地区の益々のご発展をお祈り申し上げます。



もないのにむやみに薬を飲まない。⑥元氣だからといって無理をしない。⑦薬をせず、適当に運動を。

以上が、健康長寿のこのつようです。精進料理にも「七里四方」という言葉があります。七里ですから約三十キロメートルですが、七里以内にある食べ物、同じ空気、同じ水、同じ土で育ったものが一番体にいいということだそうです。私は、小浜の焼き鯖が大好きです。でもこのごろ新幹線に乗っても焼き鯖寿司を食べてられる方がおられます。全国どこからでも宅急便で食べ物が届く便利な時代になっていきます。もう一度、食を見直す必要があるのではないのでしょうか？



それぞれの通学路

第71回卒（昭和55年）

東京都府中市 倉谷 光博

お盆の帰省を終えたある日、この会報への寄稿という機会をいただきました。「何を書こうか」と考えているうちに、記録的な猛暑の夏も一雨ごとに秋へと移り変わり、いつの間にか原稿の締め切り日が近づいていました。思い返せば、小学生の頃にあつた夏休みの宿題も毎年こんな有り様でした。変わっていないことを喜びつつ、成長していないことを反省しながら、あの頃を少し振り返ってみたいと思います。

あらためて考えてみれば、故郷を離れ、今では東京で暮らす期間の方が長くなりました。都心へと向かう通勤電車では、サラリーマンと同じように、ランドセルを背負った小さな子供たちが、人波に見え隠れしながら通学しています。また、残業で遅く帰宅する頃にも、塾通いの子供たちを多く見かけます。そんな光景を見るたびに、自分たちの頃との違いに驚かされます。今は健康のために歩くように心掛けていますが、あの頃は毎日毎日日本当によく歩いたものだと感じます。下野木から野木小学校までは約一時間ほどの道程だったと思いますが、六年間も通い続けられたのは、子供ながらに楽しむ術を知っていたからでしょうか。春は土手や農道にふきのとうが芽吹くのを眺め、夏は河川で魚やザリガニを見つげながら通いました。秋は夜露で羽がぬれた赤とんぼを学生服いっぱいに付け、冬は除雪されていない農道を腰まで雪に埋もれながら歩きました。

これが帰り道ともなれば、時間を気にすることなく、その行程も自由気ままに。水路の中を靴をぬらしながら歩



いたり、木の枝やすすきの穂を片手に、落葉がいつぱいの山道を駆け回ったり、特に冬は、ビニールの肥料袋をソリにして土手を滑ったりと、お楽しみが満載でした。そんな楽しむことに一生懸命になれた通学路は、塾とは違った自然の学び舎だったのかも知れません。小学校という長いようで短い六年間の過ごし方は、それぞれだったと思います。どれも良い悪いという訳ではありませんが、自分にはいい思

い出となつて今に残っています。あの頃は「これが普通」と思つていたことも、時代や地域が変わればこれほどまでに「特別なこと」であつたことを、あらためて感じました。

人生の通学路は、そろそろ帰り道くらいかも知れませんが、いつまでもあの頃の遊び心は忘れずに、一生懸命に楽しんでみたいと思います。ただ、あの頃には無かつた筋肉痛と

野木の里を離れて

第84回卒(平成4年)

兼田 石田 友美



野木の里を離れてから、十年を超えました。小学生の頃は、授業中の時計の進み方が遅く、休み時間までの「あと五分」がとても長い時間を感じましたが、この十年の月日はあつという間でした。たまに野木へ帰省をすると、様子の変化に度々驚いてしまう事があります。

の規則とは、自転車での行動範囲が決められていた事です。その頃、小学校低学年は自分の住んでいる地区、中学年は隣の地区、高学年は野木地区全域が認められておりました。行動範囲が拡がるにつれ、自分の地区とは違う景色を見る事ができ、発見をし、大人に近づいた気がしていました。夏休みのある日には、泉岡一言神社から杉山の山奥まで

「探検」と言つて、友達と道に咲く草花を摘みながら自転車で走つた記憶があります。今だからこそ思うのですが、

いつも元氣いっぱい明るい野木っ子が多いのは、都会とは異なり、広い土地で自由に存分に遊べる環境があつたからだだと思います。

さて、私は、地元の高校を卒業してからは、京都で四年間の学生時代を過ごし、その後、

仕事の関係で土地を転々としております。仕事で出張をする事も多い訳ですが、昨年は出張の最中に、予期せぬ野木の風景を見る事が出来ました。それは、鳥取空港から新千歳空港間の空路、高度一〇、〇〇〇m上空からの野木の風景です。

飛行機に乗つてから三十分ほど経つた時、丹後半島を越えた辺りから、前方に若狭湾の複雑なりアス式海岸が視界に現れてきました。そして辛うじて認知できる程の国道二十七号線を見つけ、その先をずっと辿つていくと、小学校の地図コンクールで描いた、小浜湾のあの蟹のハサミのような地形が見て取れました。「も

う直ぐの野木の真上を通る！」そう思うと、いつの間にか思わず身を乗り出して飛行機の窓に顔をくつつけていました。

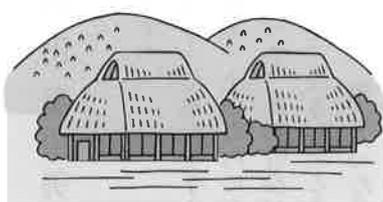
飛行機からまず見えたものは、野木の端と端をつなぐ一本の中心道でした。高学年になり、自転車で動ける範囲が広がつた嬉しさで、何度も通つたあの神社から杉山までの道のりは、

上空から見ると、自分の小学校時代を濃縮させた、あの大きな大きな野木道でした。野木道を中心とした、山々に挟まれた野木の平野は、意外にも小さな面積ではありましたが、多くの人を育んだたくさん自然が周りを囲んでおり、とても力強く感じました。

家族と地域の方々にて育てられ、私は今年で社会人八年目となりました。そして育ててくれたその「野木」という地域を、この時、初めて広い視野で見ることができました。野木小学校校歌に、心にも太陽輝き〜♪歌つて楽しい野木の里〜野木小学校〜♪というフレーズがありますが、今だからこそ、そのフレーズが校歌に挿入されている意味が分か

る気がします。どの年代の方でも、野木っ子は強くたくましく、明るい温かい人たちが多いと感じます。野木を離れて十年経つてもそのように感じますし、私もいつまでも、その一人でありたいと思います。何年経つても人と自然環境が変わらない、この点は私のふるさと自慢です。

自分を育ててくれた故郷に感謝すると共に、今後益々の発展をお祈り致します。



小学校時代の思い出

第65回卒(昭和49年)

東京都世田谷区 新田 康彦

記憶がイマイチ曖昧なのである。多分、同級生とやってきたのだと思うのだが……

野木小学校を卒業するまで何回となくやったハンドベースも、それ以降はまったくやらなくなってしまった。

野木小学校でのローカルな遊びだったのだろうか？

今の子供たちは多分やってはいないだろう。こんなに楽しくて簡単な遊びは他に無いのに。

講堂(現在は体育館)で、雨の日だつて雪の日だつて、風の強い日だつて、ゴムボール一個と簡単なルールで、楽しさは無限大。

昔のように軽やかには動けなくなつたけど、今でもやつてみたい遊びである。

この文章を書いている間もあれこれと鮮明に甦つて来る思い出は、自分の心の財産であり、これからも故郷同様大事にして行きたいと思う。

最後に今回このような機会を頂いた同窓会委員の方々にお礼を申し上げます。

小学五年生

第87回卒(平成8年)

武生 山田 真由美

同窓会の原稿を書かせて頂く事になり、野木小学校で過ごしていた日々を今、思い返しています。

印象強く思い出すのは、「小学五年生」、私の人生において一つの転機になった学年だと思えます。

私たちの学年は、男子六人、女子三人。当時としては人数の少ない学年でした。(現在の野木小学校では、十人前後の学年が多いと聞きました。少し寂しく感じます。)

少ない人数でしたが、みんな仲良く家庭的で、とても良いクラスでした。学校でも、家に帰ってからよく遊んでいました。クラスの子以外で遊ぶのは、もっぱら同じ武生の子ども達。学年に関係なく、ほぼ毎日遊んでいました。顔なじみのみならずと過ごす毎日、楽しくて安心感に包まれてい

たと思えます。

そんな中やって来た小学五年生の夏休み。上中町内の五年生が集まって、自然教室が行われました。うるしだるまに顔を描いたり、海に入ったり、キャンプファイアーをしたり、いろいろな体験をしました。

一番大事な体験は、初めて出会った人たちと過ごし、話して作業すること。今まで、こんなにたくさんの人たちと接する機会はありませんでした。

私はこの時から、いろんな人と接し、話をする事の楽しさを知ってしまったようです。

自然教室から帰ってきた私は、とても生き活きとした顔をしていて、大人になった私に、母が教えてくれました。

以来私は、小学校で紹介される料理教室に行ったり、北前船で北海道に行ったり、積極的に学校以外の行事に参加

野木小学校を卒業してから千支が三回以上巡ってしまつたが、あの頃のことをあれこれ思い出していると、いろんなことが思い出される。

帰省の度に学校前の県道を通ると、当時の懐かしさがこみ上げて来る。

楽しかったこと、辛かったこと、悲しかったこといろいろあつたはずなのに、でも不思議と楽しかったことばかりが頭を過ぎる。

臨海学校、鼓笛隊、遠足、運動会、給食等数え切れない。その楽しかった中でも、私の小学校時代の一番の思い出はハンドベースだ。

現在はもう無いが、旧校舎の講堂で軟式テニスのボールを手で打って走る。ルールは野球とほぼ同じであつたが、タッチの代わりにベース間を走っている際にボールを当て

られてもアウトだつた。壇上まで届けばホームランとか、いろんなローカルルールも多数あつたと思う。

ブームのように時期的なものもあり、朝から始業前に、授業間の休み時間、昼休み、放課後等よく飽きもせずに行つていた。講堂でやるため、天気は左右されないことも流行つた理由のひとつだし、道具は必要なかった(ゴムボールのみ)こと、少人数でも楽しめたことも一因だ。

しかし、こんなに楽しかったハンドベースではあるが、やっていたメンバーは同級生だけだったのか、上級生や下級生も混ざつてやっていたのか、思い出されぬ。

自分たちが下級生の時は、上級生ともやっていたような気もするし、下級生とはほとんどやっていない気もする。

するようになりまして。

外向的、誰にでも話しかけられる今の私の原点は、小学五年生の夏。それは、中学、高校、専門学校を経て、今、よりパワーアップしていると思います。

小学五年生は、初めて町の音楽会に出場し、小太鼓をさせて頂きました。リズム感がないのか上手くいかず出来ず、指揮をしている岡本先生の隣で練習したこと。体育の授業は五・六年生合同で、最初に走る校庭の大回りのランニングがとてきつかったこと。大変だったことも沢山思い出します。

野木小学校で経験したことの一つ一つが、私の基盤となつていと感じます。

今も私は、行きたい土地へ旅行し、いろんな体験をし、やりたい仕事をし、沢山の人と出会って楽しく生活しています。

次にやりたいのは、フルマラソン。自由にフラフラしすぎて…困ったもんです。

新成人からの便り

愛すべき未来へ

第94回卒(平成15年)

下野木 上野宏隆

私は現在、美容専門学校に通っており、大阪で一人暮らしをしています。大阪での生活も約一年半が経ち、ようやくこの地になじめてきたように思います。それでも、こちらの生活に疲れた時は、故郷である野木をよく思い出します。

私の家は下野木にあり、毎日一時間近くかけて小学校まで通っていました。晴れの日は、かけっこをしながら通ったり、雨の日は空に向かって叫び、雨がやむように呪文を唱えたりしたこともありました。冬の寒い日は、凍った水たまりの上をみんなで滑って遊んだり、雪が降った日には興奮して雪で遊びすぎて、学校に着くころには必ずといていいほど手がしもやけになっていました。今となっては、想像も出来ないほど元気だったなと我ながら感心してしまいます。

そして、学校生活ではすべての授業が楽しかった覚えがあります。先生の分かりやすい解説と工夫された授業のおかげで楽しく学ぶことができました。その中でも私が大好きだった授業は、体育と図工でした。図工では、ものを作ることが好きで、粘土で作品を作ったり版画を作ったりしたことがとても印象に残っています。少し自慢になります。が、版画で銅賞をもらったときは本当に嬉しかったです。体育では、特に球技が好きでした。サッカー、バスケットボール、ドッジボール、どれも本当に楽しくて、授業が終わるチャイムが鳴ってもまだやりたいと先生にだだをこねるときもありました。休み時間には、ほぼ100%運動をして遊びました。晴れた日は外へ、雨の日は体育館へ誰よりも早く着きたい一心で走ったことを覚えています。学年に関係なく遊んだあの空間が私は大好きでした。他にも様々な思い出が今でも鮮明に蘇ってきます。学年のみんなで行った自然教室、集落合同の運動会、音楽会、そして少年野球。まだまだ書ききれないほど沢山の思い出がありますが、その一つ一つ

が今の私の原点であり大切な宝物です。

私は、来年の春から東京で働きます。腕を磨いて、いつの日か私をここまで育ててくれた両親、私に関わってくれたすべての方々、そして私の原点である野木に恩返ししたいと思っています。

いつまでも、野木の未来が輝き続けることを祈っています。

自慢のふるさと

第94回卒(平成15年)

上野木 居関彩子

「すごくきれいな」私の友達が言った一言を、私はきつと一生忘れられないと思います。

野木小学校を卒業してから八年が経ち、現在は大学に通うために神戸に住んでいます。なかなかこちらに帰ってくる

ことができずさみしい思いもありません。見知らぬ土地でのたくさんの人との出会いや様々な経験はとても新鮮で、自分を成長させてくれています。

そして私は今年、成人式を迎える歳となりました。この歳になり、恥ずかしながら初めて本場の野木のすばらしさに気付いたのかもしれない。今年の夏、私は大学の友達を連れて野木に帰ってきました。こっちはきても何にもないよ！本当に田舎だからね!!と散々言い聞かせて、それでも来ると言った友達に根負けして決

まった夏休みの旅行。正直に

児童作文(家庭の日の作文)

お母さんとの約束

六年 橋本明歩

言うと、私は友達にあまり自分の故郷を見せたくなかったのかもしれない。大阪などの街で育った私の友達は、こんな田舎に来て何を思うだろう……と少し不安だったからです。しかしそんな不安は少しも必要ありませんでした。むしろ、友達は自然だらけの見慣れない風景にわくわくしているように思いました。最後の日、駅までの道を歩く中、友達の言った一言に私はとてもびっくりしました。

「すごくきれいやね」彼女は稲が黄色く色づいた田んぼと緑の山を眺めながら真面目にそう言いました。山の上から見る絶景でもなく、海から見る夕日でもなく、私が毎日なげなく見ていた日常の野木の風景を見て彼女は言いました。私の頭の上にはクエスチオンマークがおそらく出ていたでしょう。

え？ただの田んぼやけど……私は心の底から驚きました。いつも当たり前前にそこあった山や田んぼを見て、きれいと思えて思ったことなどほとんどありませんでした。

ただ友達にとっては見慣れない風景だったからそう思えただけなのかもしれない。いろんな景色を見ていくうちに、あの時の山の緑も田んぼの黄色もこれから見るとくさんのきれいな景色のなかに埋もれていくのかもしれない。ただ私にとってその一言は大きな意味のあるものでした。ぐらりと囲む山々も、遠くまで広がる田んぼも、野木のこの風景すべてが変わって見えるようでした。うれしさと誇らしさ、がいつのまにか私の心を満たしていました。

神戸に帰り街を歩いていると、コンクリートの建物と車がひっきりなしに通る道路に囲まれた道を、友達と楽しそうに

はしゃぎながら家へ帰る小学生を見かけます。あの子たちは田んぼで遊んで寄り道をしたり、あせ道の草を摘みながら家へ帰ったりなんてしたことが

となんてないんだと思うと、私はやっぱり幸せだったんだ

など感じます。

「野木つ子で本当によかった」

今、心からそう思います。

夏休みに入ってから、私はお母さんと約束をしました。

それは「毎日、ひとつは家の手伝いをする。」ということ

です。今まで、げんかんのくつを並べるとか、家のまわりの花に水やりをするとかいう

手伝いを決めてやってきたことはありましたが、今年はず

しちがいます。お母さんは「今年

は六年生になったんやから、もつといろんなことが

できるといいやん。できてと

うせんかしらんねえ。」と言っていました。それで、お

母さんが仕事に行くときに「今日は、〇〇お願いね。」

という手伝いをする事になりました。

私は、何だかお母さんの都合がいいように持っ

ていかれたような気もしましたが「確かに六年生だし、し

かたないかな。」とも思いま

した。

そして夏休みが始まりました。

天気の良い日は、洗たく物干し、

天気の悪い日は茶わん洗いを

することが多かったです。洗

たく物は、暑い日になると、

茶わん洗いの、洗つてもすぐ次に使われて、なんかやったあという気持ちになれませんでした。でも、毎日、この何倍もの仕事を繰り返してお母さんはしているんだなあと思いました。きつとお母さんは、「してあげている。」とは思わないだろうなあと思いました。

別の日には、地区の花だんの水やり当番の手伝いに行きました。お母さんがホースのつなぎ方が分からないで困っていたので、私がかためしてみたら、カチツと音がしてはまりました。「あきちゃん、すごいやん。助かった。」とお母さんが言ってくれたのでうれしかったです。他にも、そうじ機がけや水モップかけもしてみました。新しく買った水モップは、足でペダルをふむとバケツの中ですくくる回

つて水が切れるのがおもしろかったです。学校でもモップがけは前に向かってまっすぐにおしていくけど、家では、左右に動かしてふくことを習

いました。手首を返すのが少し難しかったけど、しばらくしたら慣れてできるようにな

りました。

お兄ちゃんの部活動の洗たくもありました。朝に洗たく機を二回まわして、夕方にまた一回する時もあった、本当に大変な仕事です。はじめのうち

はしわをのびさずに干したり、夕方になつても取りこんでい

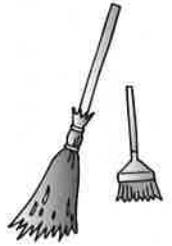
なかつたりしてしかられることも

りました。

まだ私にできる手伝いは少ないので、もっともつとお母さんの手伝いをしたいです。

ぼくの役目

五年 栞原 健太



お母さんの妹に四月八日に男の子の赤ちゃんが生まれました。勇磨という名前がつけました。ぼくのいとこになります。ぼくは、とてもうれしかったです。みんなとても喜んでいました。勇磨がいる間は、みんな勇磨のお世話をしました。ぼくは、お風呂の準備をやりました。勇磨をお風呂に入れたらとても気持ちよさそうでした。でも、機嫌が悪いとすぐ泣いてしまうので世話をするのがむずかしいです。でも、赤ちゃんは、分からないから仕方がないなあと思いました。赤ちゃんは、泣くのが仕事なのです。ぼくも赤ちゃんのころこやつてもらったんだなあと思いました。お母さんが、

ぼくにやってくれた分、お母さんに親孝行をして返してあげたいです。お母さんの妹は寝る時間もあまりありませんでした。それでも一生けん命に赤ちゃんのお世話をしていました。ぼくは、お母さんといっしょには本当ですごいなあと思いました。おぼんにおばあちゃんの家に行きました。仏様におそなえをしてお線香を立ててみんなで手を合わせました。それから焼き肉やおすしやおさしみなどたくさんごちそうになりました。近くのお宮さんで遊んだり散歩したりしました。おばあちゃんとお話もしました。「大きくなつたなあ。」と言われました。おばあちゃんは、「足がいた

くて体を動かすのが大変になってきたんや。」と言っていました。ぼくは、おばあちゃんが小さくなったように見えませんでした。ぼくが大きくなったんだなあと思いました。ぼくは、十一才になったけれど、いろんな人のお世話になってここまで大きくなったんだなあと思います。今度は、ぼくが少しずつみんなの役に立ちたいです。生まれてきた勇磨もこれからいろいろな人と出会って沢山の人の支えられて大きくなっていくんだなあと思いました。ぼくが、ここまで大きく成長できたのは、お母さんやお父さん、おばあちゃんやおじいちゃん、親戚の人など、いろいろな人のお陰だと思います。ぼくもこれからいろいろな人を助けて、これま



でぼくを助けてくれた人たちに、おん返しをしたいと思います。」「純子、お父さんとお母さんいねかりしとるし、お昼たべてな。」とお母さんが言いました。わたしは、「うん。じゃあ、おにぎりしてもいい?」と聞くと、「いいよ。お母さんもおにぎりしてほしいなあ。お父さんもお昼まだ食べてないし。」と言いました。わたしは、「うん。分かった。じゃあ、作って田んぼへ持って行ってあげる。」と、言いました。

いねかりのおにぎり

四年 奥本 純子

今日は、八月二十二日、日曜日です。わたしは、日曜日の午前中はスポーツ少年団のソフトボールに入っています。練習が終わって帰りの車の中で話しているうちに、わたしの分だけをおにぎりにして食べる予定が、お父さんとお母さん

の分までおにぎりを作ることになってしまいました。なぜかという、朝から稲刈りをするつもりだったので、昼前から稲刈りを始めたので、昼食をまだ食べていないとお父さんとお母さんが言ったからです。家に着くと、服をさがえて、じゅんぴを始めました。手をぬらして、塩を手につけて、ごはんを丸くにぎって、のりをまいたら完成です。わたしは、六こ作りました。そして白い水とうに氷とお茶を入れて、自転車で田んぼまで走って行きました。「おいしいわー。上手に丸くできたな。」とお母さんが言ってくれました。「おいしいな。食べやすいし、塩かげんも上どう。」とお父さんが食べながら言

ユリ園に行ったよ

三年 塚本星那

つてくれました。

「わたしも一つちよういだい。」と、一つもらいました。自分で作ったおにぎりをほめてもらってとつてもうれしかったし、おいしく感じました。あつという間におにぎりは、なくなりました。

（もうちよつと作つてくれればよかつたかな？）

と、ちよつと思いました。でも、お父さんもお母さんも、

「おいしい。」

と言つてくれたので、わたしは、うれしかったです。それで、いねかりのお手つたいをしました。お父さんといつしよにわたしも、コンバインに乗せてもらつて、コンバインの運転を教えてもらいながらいねかりをしました。しつぱいすることもあるけれど、

「上手やなあ。」

と言われると、すごく楽しくなつて友達にもいつぱい教えてあげたくなります。これからもずつといねかりのお手つたいをしていきたいです。そして、おにぎりも、もつとたくさん作つて食べてもらえるようにしたいです。

八月十六日にお父さんとお母さんとわたしの三人で、はこだて山の上のあるユリ園に行きました。

山の上までは、ゴンドラに乗つていきました。ゴンドラに乗つたのは、はじめてです。とてもけしがきれいでした。

田んぼが小さく見えました。小学校のグラウンドや家も小さく見えました。そして、びわ湖が見えました。とても大きくてきれいでした。お母さんが、「きれいやなあ。」と言つて

いました。ゴンドラからおりたら、いろんな色のユリの花がさいっていました。オレンジ色のユリが一番きれいでした。お母さんはピンクのユリがきれいと言っていました。お父さんは、黄色が好きと言っていました。みんな好みがちがうんだなあと思えました。

とてもきれいだつたのでい

つぱい写真をとりました。いろんな人もけいたいやカメラで写真をとっていました。

いづぱい坂道がありました。小さな山に登つてみると、またきれいなユリの花がさいていました。お母さんは、花のにおいをかいで「いいにおい。」と言っていました。

お母さんは、お花が大好きです。おばあちゃんも、いづぱいお花を育てています。いつも朝と夕方にお水をあげています。だから家の周りには、

いづぱいいろんなお花がさいています。この日は、おばあちゃんも、用事があつて、いづしよに来れませんでした。いづしよに来れなくてとても

いづしよに行きたいです。帰りにお店でお父さんとお母さんは、ユリのアイスを買

いました。わたしは、いちご

のかき水を買つていすにすわつて食べました。冷たくてとてもおいしかったです。

そして帰るときまたゴンドラに乗りました。行きとはちがうけしが見えました。ゴンドラもおばあちゃんといづしよに乗りたかつたなあと思

いました。

ゴンドラをおりたら、ユリ園のおじさんがとつてくれた家族の写真を売つていたので買いました。周りには、ユリの花がいづぱいうつつていました。

家に帰つて、おばあちゃん

に写真を見せてあげました。

おばあちゃんは、「あら、いとこ行つてきたなあ。」と言っていました。

今度ユリ園に行くときは、ぜつたいおばあちゃんをつれていつてあげようと思ひました。

たいへんなじぶと

二年 居関音心

夏休みに、おかあさんといづしよに、上中にあるクリーンセンターで、ペットボトルのリングを切るボランティアをしに行きました。

クリーンセンターには、か

らになつたペットボトルがいづぱい入つてるとうめいの

ふくろが、山のようにつんでありました。

クリーンセンターの中は、なにもしないでもいい、あせ

が出るくらいあついで、あせ



あせが出ました。

わたしが、

「あついよう、もうかえりた
いよう。」

と言ったら、

「これをおしごとで毎日して
いる人は、もつと、たいへん
なんやで。」

とお母さんが言いました。

こんなたいへんなことを、お
しごとをしている人がいると
わかつて、すごいと思いました。
だつて、こんなあついところで、
手がいたくなるまでペットボ
トルのリングを切っている人
がいるなんて思いもしなかつ
たからです。

わたしたちがのんですてて
いるペットボトルをかいしゅ
うして、リングを切つて、リ
サイクルをするためにがんば
っている人がいることをしり
ました。

あつい中でがんばったあと
に食べたアイスクリームは、
いつも食べているアイスクリ
ームよりもおいしかったです。



草むしり

二年 竹村ゆうと

みんなで朝ごはんを食べて
いるとき、お父さんがぼくた
ちに、

「ごはんがおわつたら、いえ
のまわりの草をむしつてくれ
んか。」

と言いました。おねえちゃんは、
「わかつたよ。」

と言つたけど、ぼくは、
「えーっ」

と言いました。おねえちゃん
に

「いっしょにやろう。」

と言われて、

「めんどうくさいな。」

と思つたけれど、ごはんがお
わつてから外に出ました。

おねえちゃんと草むしりを
していたら、ばあちゃんが、

「ばあちゃんも手つたうわ。」
と言つてくれました。ばあち
やんはとてもじょうずに草を
むしります。おねえちゃんも
がんばっていたので、ぼくも

「がんばつてむしろう。」と
思いました。きれいに、ねつ
こまでとれるとうれしかった
です。

三人でがんばつたのできれ
いになりました。ばあちゃん
がぼくたちに

「きれいになったわ。またし
てくれよ。」

と言いました。ぼくとお姉ち
やんは、

「うん。分かつた。」

と言いました。

おとうさんとおかあさんは、
「ありがとう。」

と言つてくれたのでうれしか
つたです。



じいちゃんのおじい

一年 につたまこ

わたしは、じいちゃんのご
とがだいすきです。いつもほ
いくえんまで、くるまで、お
くつてくれました。じいちゃ
んは、こおひいがすきで、あ
さごはんをたべると、まいに
ちこおひいをのんでいました。
じいちゃんのおおひいを、わ
たしももらつてのみました。

おとうさんと、おかあさん
がしごとに行くので、わたし
とゆきのは、じいちゃんとは
あちゃんといっしょに、ごは
んをたべました。よるごはん
のときに、にんたまらんたろ
うがはじまると、わたしとゆ
きのは、いつもおどつていま
した。じいちゃんは、じょう
ずやなあ、といつもいつてく
れました。

わたしが、ほいくえんのね
んちようぐみのとき、じいち
やんは、びょういんに、にゆ
ういんしました。ばあちゃんは、

まいにち、びょういんへいつ
ていました。わたしもときど
きおみまいにいきました。じ
いちゃんにじゅうすをもつて
いつてあげました。てがみも
かいてあげました。はやく、
げんきになつてねと、てがみ
にかきました。でも、じいち
やんは、三月十日になくなり
ました。わたしは、すこしま
えに、みずぼうそうになつて
いたので、びょういんにいけ
ませんでした。わたしと、ゆ
きのと、さやと、なたしよ
うのおばあちゃんは、いえでま
つていました。

ほいくえんの、しゅうりよ
うしきや、がつこうのにゆう
がくしきのときに、じいちゃん
はいませんでした。わたしの、
らんどせるやせいふくをきて
いるところを、みてほしかつ
たです。

わたしのおとごと

一年 くらたにここな

わたしには、おとうとがいます。なまえは「はるき」といいます。はるきは、わたしが四さいのときにうまれました。おとうさんと、つるがのおばあちゃんといっしょに、うまれたしゅんかんをみていました。うまれたときは、かおも、てもあしもぜんぶちいさくて、かわいかつたです。わたしがうまれたときも、みんながえがおでよろこんでいたのかなとおもいました。

はるきがうまれて、いっしょにせいかつをするようになって、おねえちゃんになれてうれしい、たのしいきもちだつたけど、すこしさみしいきもちになることがあります。おやつもおもちやもひとりじめできたのに、はんぶんこしなきやいけないし、おかあさんもとられてしまったようで、かなしくなりました。

「わたしとはるきとどつちがだいじ？」とおかあさんにきいてみました。おかあさんは、「どつちもだいじ。ふたりともかわいいよ。」といいました。それをきいて、なんだかほつとしました。

はるきはちよつぷりおおきくなりました。いっしょにあそぶこともできるし、すこしはなせるようになりました。わたしのおやつをよこどりしたり、たたいたり、じやまをしたり、いやなことをするようになりました。

そういうときは、どこかにいってほしいなとおもいます。でも、わたしがいないと、あたまをよしよとなでてくれます。あさ、がっこうへいくときは「ばいばーい。」とげんきでみおくつてくれます。はるきがないでいて、わたしのところへあまえてくると、

かわいいなどおもいます。だつこして、とんとんしてあげると、いつのまにかえがおになっていきます。わらっているはるきをみると、わたしもえがおになります。いやなこともあるけど、やっばりだいすきです。わたしのおとうと、いつまでもなかよしでいたいです。



校歌額を新調しました

長年、体育館に掲げてありました校歌額の痛みがはげしかったため、このたび、同窓会理事会のお許しを得て、新調させていただきました。

新しい校歌額は、表面がアクリル仕上げで、ボールなどが当たっても大丈夫なようになっています。

中身の作品は、本校の同窓生で校長先生もなされた鹿野公夫先生にお願いしました。

あわせて、中川平太夫氏揮毫の「初志貫徹」の額も修繕していただきました。

ご来校の節には、どうかご覧になってください。



編集後記

今年には記録的な猛暑の年がありました。このような年は冬の寒さも一段と厳しくなると言いますが、同窓会員の皆様には、いかがお過ごしのことでしょうか。母校や、同窓会員の近況などをお知らせする「野木小学校同窓会報二十一号」ができあがりしたので、お送りさせていただきます。

原稿執筆をお願いいたしました皆様方には、お忙しい中にも関わらず、快くお引き受けいただきました。お陰様で、大変内容のある会報にしあがり、編集委員一同心から感謝いたしております。

異常気象のためか熊が出没したり、イノシシが県道を走ったりという野木地区でしたが、全校児童とも元気で、欠席もほとんどありません。

会員の皆様におかれましても、ぜひ、近況などを、投稿いただければ有り難く存じます。

末筆ながら、会員の皆様のご健康とご繁栄をお祈り申し上げます。